取材日：2017年4月26日

Rheumatoid Arthritis
RA
リウマチ

名古屋医療圏
（昭和区・名東区）

# 総合内科医とリウマチ専門医のプロ同士がそれぞれの役割をまっとうして成立する連携。

## Point of View

① 病院の総合内科から地域のトップレベルの専門診療所へ「紹介」
② リウマチ診療における関節エコー検査の有用性、重要性を共有している同士だからこその連携
③ 若手医師や臨床検査技師などの人材育成においても協力し合う

日本赤十字社名古屋第二赤十字病院
第二総合内科部長
横江 正道先生

医療法人名古屋究佳会
さいとう整形外科リウマチ科院長
斉藤 究先生

### リウマチを診る総合内科医を診断からサポートする専門医

名古屋第二赤十字病院（以下、第二赤十字病院）では、総合内科がリウマチ診療を担っている。

同科部長の横江先生が、その経緯について語る。

「2006年に総合内科が開設され、不明熱を扱う中で、突きつめるとリウマチ性疾患と判明し、整形外科のリウマチ専門医にバトンタッチするケースが多くありました。

そこで、2010年ごろから当科でもより本格的にリウマチ診療に取り組み始め、整形外科との協働が増えていったのですが、2015年に整形外科のリウマチ専門医が退職してしまいました」（横江先生）

しかし、名古屋市内での第二赤十字病院の存在感は大きく、リウマチ専門医がいないとわかっていても頼ってくる患者は絶えず、総合内科がリウマチ診療に対応することになる。当初は不安もあったそうだ。

「私たち内科医は、手足を触る、関節を診ることには不慣れです。自分たちの診療は正しいのかどうか、採点者、つまりリウマチ専門医がいない状態では、正直、迷う場面もありました」（横江先生）

なんとか診療の質を上げなければとの思いから、横江先生が考えたのが、高い専門性を持つ地域の整形外

横江先生

斉藤先生

科診療所との連携だった。

そして現在、さいとう整形外科リウマチ科院長の斉藤先生との信頼関係が、もっとも強固になっているという。

斉藤先生は、整形外科医としては異色の経歴を持つ。

「幅広く診療できる医師になりたいと思い、大学卒業後、内科で２年、その後、救急で１年の研修を終えてから専門に整形外科、サブスペシャリティとしてリウマチ性疾患を選択したのです」（斉藤先生）

斉藤先生が内科や救急の経験を持っていたゆえに総合内科の立ち位置についての理解もあり、連携がよりスムーズになった側面もあったに違いない。

「診断の難しい患者さんは、斉藤先生に紹介して、検査からお願いしています」（横江先生）

「当院で可能な検査はすべて行い、リウマチ性疾患の確定診断をつけ、治療方針のオピニオンやサジェスチョンを添えて、横江先生にお返しするようにしています」（斉藤先生）

つまり、ここでは診療所から病院への紹介とは逆パターンの「紹介」が行われているのだ。

「患者さんが、当科に戻ってくるのと同時に、診断や治療に関するたいへん的確なフィードバックをいただけるので、当科においても質の高いリウマチ診療が可能になっています」（横江先生）

## 早期診断と寛解判断には関節エコー検査が有効

横江先生と斉藤先生がリウマチ診療で最重視しているのは早期診断。さらに、それに貢献するのが関節エコー検査であるとの共通認識も持っている。

「メトトレキサート（MTX）や生物学的製剤の登場以降、リウマチ性疾患は、早期に治療を開始すれば寛解をめざせるようになりました。そこで、早期の症状を簡便かつ正確に判定できる検査として関節エコーに注目しました。

一般的に整形外科の外来では、エコーは馴染みのない検査です。しかし、私は内科や救急での研修を通して、その扱いには慣れていたので、リウマチ診療においても早い時期から関節エコーをとり入れたのです」（斉藤先生）

血液検査と関節の触診は、リウマチ診断における基本中の基本で、経験豊富な専門医の触診の精度は、相当なものだとされる。

近年では、これらにさまざまな画像検査を組み合わせて診断が行われている。

「関節エコーは、関節内の血流を測定し、きわめて早期の病状の把握を可能にします。簡便に検査を行えるので、患者さんと画像を見ながら話し合って、その場で治療方針を立てることもできます。

X線も有効な検査ですが、画像に写る穴は、すでに関節の破壊が始まっている証拠。つまり、X線画像が関節破壊が始まったあとの像を写すのに対し、エコー画像は関節が破壊される前の段階の炎症までも示せるのです。

関節エコーは再現性に課題があるとの指摘がありますが、一つひとつの関節をきちんと丁寧にチェックする技術があれば、ベテラン専門医の触診に勝るとも劣らない精度で、ごく早期、あるいはごく軽度の滑膜炎さえ見つけ出せます」（斉藤先生）

腫れや痛みがない滑膜炎も、エコーでなら見逃されない。また、早期診断以外に、もうひとつ関節エコーが活躍する大事な場面があると両先生は言う。

「寛解の判断をするときです。前述のようにリウマチ性疾患は寛解を望めるようになり、バイオフリー（生物学的製剤を止める）やドラッグフリー（薬物療法を止める）さえめざせるほどに進んできています。

となると、真の寛解を見きわめる目が必要になります。『寛解のように見えるが本当にそうなのか』などの見きわめの際に有効なのが、やはり関節エコーです」（横江先生）

「したがって、第二赤十字病院と当院が連携して診療している患者さんについては、超早期の診断とともに真の寛解の判断も、当院のエコー検査で行っています」（斉藤先生）

それにしても横江先生と斉藤先生の意気投合振りはすばらしく、互いへの心からの敬意が感じられた。

「総合内科医の重要な役割のひとつは診断のなかなかつかない患者さんの疾患が何かを突き止め、必要であれば安心してお任せできる専門医に引き継ぐことでしょう。

必要なときに頼るべき専門医がいるなら、病院から診療所への紹介だとしても、無意味なプライドを振りかざさず、きちんと患者さんを送るのが我々の責務だと思っています」（横江先生）

横江先生の姿勢には、総合内科医の真髄が見て取れた。真のプロフェッショナル同士だからこそ、患者にとってベストの治療のための連携が成立しているのだろう。

## ハンズオンセミナーや診療所の実習で後期研修医や技師を教育

専門医でなければ診断から治療、寛解の見きわめまで、非常に難しいリウマチ性疾患。そのため、第二赤

【資料1】

## 関節エコー検査の実施例

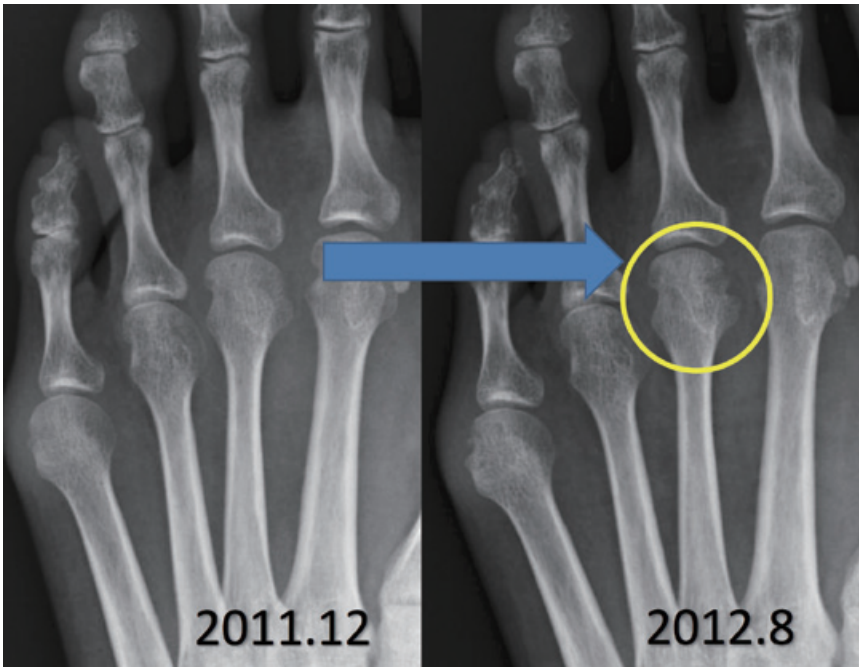
〈40歳女性〉

On　MTX8㎎

CRP 0.3　ESR　20～30
MMP-3　35～59
PtGA　0
DrGA　10
DAS28ESR4　2.38（<2.6）
（ESR30にて計算）
SDAI　2.0（<3.3）
CDAI　2.0（<2.8）
BOOLEAN REMISSION

BOOLEAN REMISSIONも達成している症例で、日常の痛みもなく、生活可能。

〈8ヵ月で骨びらんの進行が見られた〉




BOOLEAN REMISSIONを達成していても、左3趾の骨びらん進行が見られた。

十字病院と、さいとう整形外科リウマチ科は、教育においても連携を図っている。

実は、さいとう整形外科リウマチ科では、設立間もないころからリウマチ診療のハンズオンセミナーを実施しており、独立行政法人国立病院機構名古屋医療センターや、愛知医科大学病院、近隣の診療所などから多くの若手医師が参加している。第二赤十字病院総合内科の後期研修医も同様に、このセミナーで学んでいるのだ。

セミナーはショートレクチャーと、触診から関節エコーのプローブの当て方などの実技、患者の了解を得られれば、実際に「燃えている」所見を診ることまでを行う実践的な内容だという。

「ハンズオンセミナーを経験した後、もっと深くリウマチ性疾患について学びたいとの希望を持った研修医がいた場合は、１ヵ月間、さいとう整形外科リウマチ科にお預けしています」（横江先生）

「この長期の研修になると、日常の診療に立ち会ってもらいますので、問診から始まる筋骨格系の診療のすべてを体験できます。

慣れてきたら『触診をしてみて』とか、『私が診る前にエコーを当てておいて』といった具合に、診療を任せる場合もあります」（斉藤先生）

この１ヵ月研修を受けた後期研修医はすでに２名いる。そして、次の段階として横江先生は、臨床検査技師の教育についての連携も考えているそうだ。

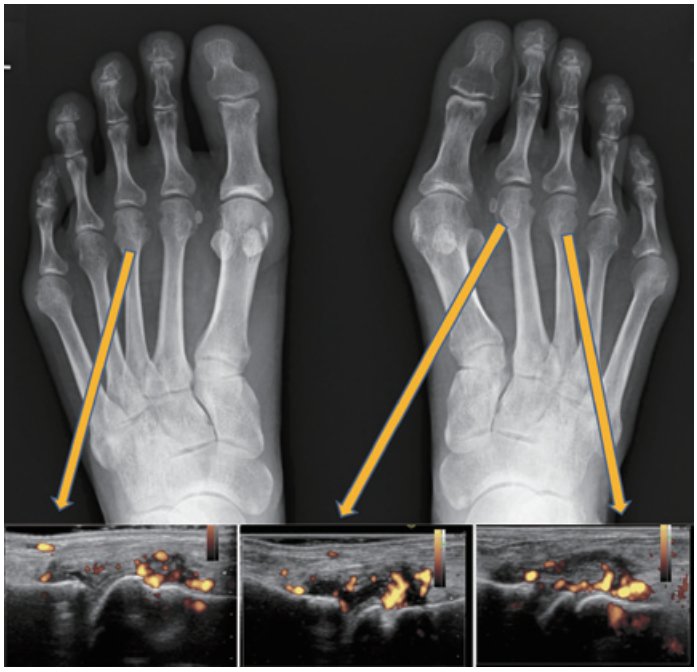
「今、いよいよ当院でも『関節エコーを積極的にやっていこう』との気運が高まってきており、これまで以上に頻繁に関節エコーを使える体制が整ってきました。

治療経過のフォローアップの関節エコー検査は、検査部門の臨床検査技師に担当してもらうので、彼らも斉藤先生のハンズオンセミナーに送り出す予定です」（横江先生）

【資料2】

## 【資料1】の症例における治療前後の様子

〈治療強化前の関節エコー検査の画像〉



骨びらん進行を認めたため関節エコーを実施すると、左第3趾のみでなく右足趾にも活動性滑膜炎が残存していた。

〈治療強化後の関節エコー検査の画像〉

治療強化により速やかな滑膜炎消失が見られた。

## 連携の輪を広げるとともに市民への啓発活動も視野に

現状では、１病院と１専門診療所との連携だが、２人の医師は、さらに先を見据えている。

「リウマチ性疾患の診断や、治療の大きな進化に対して関心が薄い診療所は、まだ多いと感じています。今後はこの連携を足がかりに、そうした診療所の先生方に働きかけ、診診連携の構築を図り、連携によってひとりでも多くの患者さんを救いたいと考えています」（斉藤先生）

リウマチ性疾患に関心を寄せる医師が増え、躊躇なく専門医に診断を託すことで、早期の診断や治療開始が可能になる。

また、連携の輪を広げ、徐々にでも治療にたずさわる診療所が多くなり、市民も巻き込みながら地域全体のリウマチ診療のレベルが上がる。斉藤先生だけでなく横江先生も、そんな未来を思い描いている。

「医療関係者はもちろん、患者さんや市民への啓発活動にも力を入れていきたいですね。公開講座の開催や誰にでも理解しやすいパンフレットの作成など、お互いにどんどんアイデアを出し合っていきましょう。

せっかく、検査も薬剤も進歩して寛解を望めるようになったリウマチ診療です。より多くの医療者、患者さんにその現状を知ってもらえるよう努力することも、私たちの連携の務めだと思います」（横江先生）

**日本赤十字社**
**名古屋第二赤十字病院**
〒466-8650
愛知県名古屋市昭和区妙見町2-9
TEL：052-832-1121

**医療法人名古屋究佳会**
**さいとう整形外科リウマチ科**
〒465-0097
愛知県名古屋市名東区平和が丘1-10
TEL：052-776-3110

（審）17Ⅶ106